

今号は、『おさしづ改修版』第2巻(明治24～25年)の「刻限」における「道」を整理する。第2巻には28件の刻限の「おさしづ」があり、第1巻(明治20～23年)の96件と比べるとかなり少ない。そのうち、「道」が用いられるのは22件、3回以上繰り返し用いられるのは17件であり、おもに、教祖5年祭を前にした時期と教祖のお墓地の工事からご改葬までの二つの時期に分かれている。おもにこの二つの事柄との関連で「道」の用例を確認したい。

神一条で始めた道

明治24年の1月は、旧暦では明治23年の年末にあたる。2月9日が旧暦の明治24年元日にあたる。したがって、1月から2月の刻限の「おさしづ」は、ほとんどが「年末」のものである。そして、明治24年2月7日の「刻限」に「さあ〜明けければ五年という。」とあるように、旧暦の年が明けて正月26日(新暦3月6日)には、教祖5年祭を勤めるという句にあたる。それは教会本部が開設されてはじめて迎える教祖年祭である。

そこで、「道」を用いて次のように論される。

これまでは神一条で始めた道を、人間の心で始めたように思うて居れば、結構と思う。……今まで聞いた道、腰掛けたような道、人間の心で始めた道か、尋ねてみよ。神に尋ねるのやない。人々心にんにんに尋ねるのや。(明治24年1月23日)

この時期には、教会本部の開設以後、各地域に教会の設置が相次ぎ、教勢が活発になっていた。そうした中で、この「道」は、「人間の心で始めた道」ではなく、「神一条で始めた道」であることを、改めて年祭を迎える句にあたり、強調されている。

こうした文脈において、基本的な心得として、「道」を用いて次のように論される。

事情の道とは世上の道、神の道は胸の道。世上の道はどんな事して居ても、目にさえ見えねば通りて行ける。なれど胸の道は、皆身に掛かる。道に二つある、世上の道、胸の道。……神の道は、胸三寸の道であるから、通ろうと思っても通れん。(明治24年1月27日)

この中で、「神の道」と「世上の道」が分かりやすく対比して説かれている。「世上の道」は、形として現れない限りどのような心遣いをしていても表面的には問題にならないが、「神の道」を通るには、「胸三寸」つまり形になるまでの心の行いこそが大事であり、それを神が受け取って形に現される。このことをしっかり理解するよう論されている。

さらに、「これまでの道」、すなわち、教祖が始められた「五十年以来の道」には、「案ぜ〜の道」も「苦勞艱難の道」も「残念な道」もあったが、それも神が連れて通って今があるのであり、これから先も、「怖わい道」も「難し道」も楽しみに、神一条の「さしづ通りの道」を歩むように説かれている。

これから先は神一条の道。国会では治まらん。神一条の道で治める。怖わい道があって、やれ楽しみという。……治め掛けは、何か難し道である。どういふ事も難しい。……さしづ通りの道なら、どんな事も遠慮気兼ねするやない。(明治24年2月7日)

寄り来る道

明治25年には、豊田山の墓地工事が7月5日から12月7日にあり、頭光山善福寺から豊田墓地へのご改葬が12月13日(旧暦10月25日)であった。刻限の「おさしづ」は、ちょうどその時期に重なっており、お墓地の工事に関連して、心構えを説かれたものと推察される。

そこで、「かりもの捨てる所、何も派手な事要らん。」「ほんの芝ぼでよいで。」(明治25年7月4日)など、大層にならないよう繰り返し論されていることは、よく知られているところである。そうした文脈において、「道」を用いた論しに次のようなものがある。

話というは道である。……さあ〜多く〜広く〜、多く〜広く〜と言えば、どういふ事が広くという。さしづの道が広くと思うか。……多くの中から寄り来る道、何ぼでも分からん。重々刻限にも論し置いたる。遠い所始め掛けにやならまい。どれだけ不自由であろうが、聞いて結構道が始まる。(明治25年6月18日)

ここでは、お墓地の工事、教祖のご改葬についての話が「道」に例えられている。その話を、内々だけで進めるのではなく、たとえ不自由に感じて「多く広く」するよう、つまり、皆で話し合いするよう促されている。一見すると、大層にならないようにという論しと矛盾するようであるが、皆の心が寄ってはじめて「道」は進んでいくと説かれる。そして、「どんな事も尋ね掛けて運べ。決議だけでは思い〜の理がある。」(明治25年7月1日)と、具体的なことは「おさしづ」を伺って、その通り大層にならぬよう物事を運ぶように論されるのである。

お墓地完成(12月7日)を間近にした頃には、次のようなお言葉があった。

雨風にぎあ〜の道を通りて一つの理、その理無くば今日の道は無い。余儀無くの道を通りて今日の日。事情々々、道によく聞き取ってくれ。(明治25年12月4日)
掃除に掛かりてくれ。一つの道に掃除に掛からにやならんで。……何処かどうでも構わん。何ぼうでも切りは無。 (同日)

このように、これまで大変な中を通して今の「道」があることを思い、感謝し満足して、掃除に取り掛かるよう論された。この「刻限」を受けて、翌日、「教祖御改葬当日事情に付願」が伺われて、種々の具体的な取り扱いが決められることになる。

以上のように「道」の用例を概観して気づくことは、「道」が個人的な事柄ではなく、教会本部の歩みを指して用いられていることである。それは、神一条で始められたものであり、立教以来多くの難しい中も連れて通ってきただけで今があることを説かれている。その歩を進める根本的な心得は「世上の道」と「胸の道」の対比によって分かりやすく示される。また、ご改葬のような教会本部が行う具体的な普請も「道」と表現される。

このように、教会本部の歴史的な歩み、その根本的な心得(教え)、そして、目の前にある具体的な問題がともに「道」と表現され、一つの連続したものと捉えられている。こうした用い方が、第2巻の刻限の「おさしづ」における「道」の特徴と言えるだろう。